HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	母親による乳幼児の顔表情からの感情読み取りメカニズムの解明［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	松田, 久美
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12520号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65756
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Kumi_Matsuda_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　松田 久美

母親による乳幼児の顔表情からの感情読み取りメカニズムの解明

言葉による意思表示が難しい２歳未満の乳幼児（toddler）を対象とした養育場面において，子どもの発する情緒信号をどう解釈するかということが，養育行動を決定する要因の一つと言える。したがって，目に見える形での養育行動に見られる個人差の発端が，子どもの感情状態を解釈する時点においても存在すると考えられる。本論文では，乳幼児の情緒信号としての顔表情に注目し，実際に乳幼児を持つ母親にみられる顔表情からの感情読み取り傾向の個人差が，母親の個人特性によってどのように規定されるのか検討した。具体的には，まず，乳幼児の「明瞭な顔表情」及び「曖昧な顔表情」を用いて独自に作成した「乳幼児（toddler）の感情認知検査」の妥当性の検討を行った（第２章）。次に，乳幼児の顔表情の解釈に影響を与えると考えられる６つの個人特性（傷つきやすさ，ストレス反応，情動共感性，内的作業モデル，情動知能，自己統制）のうち，養育者向け尺度が存在しなかった「自己統制」の尺度を新たに作成し，その妥当性を検討した（第３章）。そして，乳幼児を持つ母親 114 名を対象に「乳幼児（toddler）の感情認知検査」によって感情の読み取りにおける個人差（以下，「感情読み取り特性」と呼ぶ）を，また，質問紙調査によって６つの個人特性を明らかすることによって，母親の「感情読み取り特性」が個人特性によってどのように規定されるのかについて検討した（第４章）。以下，各章の概略について述べる。

第１章では，乳幼児にとって「自身の情緒信号から感情が読み取られる」ことがどのような発達的意味を持つのか言及した。また，母親による乳幼児の顔表情からの感情の読み取りの重要性と，それを規定すると予測される育児に関わる６つの個人特性を説明するとともに，個人特性間の関係や，母親の感情読み取り特性と個人特性との間にある関係について仮説を提示した。

第２章では， toddler の顔表情に対する感情の読み取り傾向を短時間で測定するための「明瞭な刺激」と「曖昧な刺激」の妥当性の検討を行った。明瞭な刺激は，どのような人も極めて高い確率で同じような感情の表れとして読み取る「一般的な感情の読み取り（一般性）」の指標であり，曖昧な刺激は，快感情としても不快感情としても読み取られ，感情の解釈がそ

れぞれ異なる曖昧な「感情読み取りの個人差（個別性）」の指標である。大学生の２つの標本と、乳幼児を持つ母親の２つの標本を対象とした実験を通じて，わずか 17 枚からなる toddler の顔表情の「明瞭な刺激」と「曖昧な刺激」によって，感情読み取り傾向の「一般性」と「個別性」が測定可能であること（内的妥当性），また，それらに対する読み取り傾向が，同一母集団内の異なる標本間でも，また，異なる母集団の標本間でも再現可能であること（外的妥当性）が確認された。

第３章では，育児に携わる母親を特に意識した自己統制機能を測るための尺度の作成を目的として，予備調査（自由記述の内容を K-J 法で分類し，仮尺度を作成）と本調査及び改訂のための調査（仮尺度または改訂尺度の回答を得点化・因子分析に基づく因子構造の特定と信頼性分析）を行った。これらを通じて，自己統制の定義やその下位概念による「論的枠組みとの間に整合性のある尺度，すなわち，「自己主張・実現」と「自己抑制」という二つの下位尺度を持つ「自己統制機能尺度」が完成した。

第４章では， 4〜32 ヵ月の乳幼児を持つ母親 114 名を対象に，「乳幼児（toddler）の感情認知検査」によって感情の読み取りにおける個人差（感情読み取り特性）を，また，質問紙調査によって６つの個人特性を測定し，以下の点について検討した。まず，個人特性と感情読み取り特性との相関を分析したところ，感情の読み取りの「一般性」（明瞭な顔表情をどれだけ一般的に読み取るか）は，傷つきやすさ，ストレス反応，内的作業モデル，情動知能との間に有意な相関が認められ，感情読み取りの「個別性」（曖昧な顔表情を特定の感情として読み取る傾向）は，これら４種に自己統制と情動共感性を加えた６種全ての個人特性との間に有意な相関が見られた。さらに，６種の個人特性間の相関を分析したところ，情動共感性と傷つきやすさの間，及び情動共感性と自己統制との間以外の全ての下位尺度間に，有意な相関が認められた。これらの結果に基づいて，乳幼児の顔表情からの感情読み取りが個人特性に規定される「構造モデル」を仮定し，その検証を行った。その結果の一例を挙げると，感情読み取りの「一般性」は，傷つきやすさの２つの下位尺度「家族に対する信頼」の高さと「感情の傷つきやすさ」の低さから直接影響を受け，前者は，自己主張・実現（自己統制）が高いほど，また，怒り（ストレス反応）を感じにくいほど高く，後者は，対人対応（情動知能）がしやすいほど低いという間接的なパス構造が明らかになった。また，曖昧な顔表情を「喜び」「悲しみ」「恐れ」「怒り」のいずれかとして読み取る傾向には，内的作業モデルの下位尺度であり，対人認知特性を表す「安定」や「アンビバレント」が直接的または間接的にパス構造に含まれており，曖昧な情報を処理する際に内的作業モデルが影響するという仮説（Collins & Feeney , 2004）を実証する結果となった。

最後の第５章は総合考察であり，本研究の成果と意義，及び今後の課題と展望が述べられている。特に，本論文で用いた「感情読み取り特性」という認知心理学的指標と「個人特性」

という社会心理学的指標に加え，養育行動に影響を与えるといわれている「唾液中クロモグラニン A」という生理的指標を用いることによって，乳幼児の情緒信号の解釈の個人差や，その解釈の次の過程である実際の養育行動の質の違いを生み出す（あるいは不適応的な養育行動の生成を防ぐ）メカニズムの解明は，学術的にも応用的にも重要な課題と言えよう。